

湘南マウンテンビュー

山と緑のある暮らし 4

RICE FARMING

真砂秀朗さん「葉山」

葉山の  
谷戸で  
米作り

音楽家であり画家である真砂秀朗さんは、2年前から米作りを始めた。小さな棚田ではあるが、真砂さんの暮らしには、無くてはならないものになっている。

主要道からわずかに入った所に、種穂たなびく谷戸が広がる。里山に囲まれたなだらかな湿地帯を意味する「谷戸」。豊かな土壌に、自然に流れ下る水。ゆえに、谷戸にこそ水田の原高がある、といわれている



人と

自然が

折り合う所

人を寄せ付けぬ荒野で  
もなく、人で溢れかえ  
った都会でもない。水  
田は人と自然が適度に  
折り合う場所。そうい  
う景色は美しく、人の  
心にすっと入り込む。

稲は強い。1粒が千粒  
にも増える。何千年も  
の間、作られ続けてき  
たのもよく分かる

「自然農法、ある意味、  
ありのまま。仕事とし  
て生産性を追求したら  
たいへんだが、遊びと  
してやったら、実に楽  
しい」と真砂さん

紅葉に染まる福巖寺の  
境内に招かれて演奏し  
たことがきっかけで、ご  
住職から休耕田だった  
ここを紹介された



田んぼは4、5人の仲間といっしょに作っている。そのひとり、ブルームーンのオーナーで逗子市議でもある近藤だいすけさん(左)と。「米作りはやって楽しく、同時に自分の足もとを考えさせられます」と近藤さん





# ありのままの 衣食住

バリ島で見た人々の暮らし。朝、田んぼに出て、午後に絵を描き、夕方、ガムランを奏でる。そうした光景が今自分のものになってきた。幸福だと思う。



人が自然と折り合いをつけてきた何千年もの時間からすれば、自然を支配し生態系をも変えようという現代文明の歴史は、まだほんのわずかでしかない。築80年の和洋折衷の家。緑の中で歴史を刻んでいる。

「土はおもしろいものでね、水に溶けるし、固めれば水を止める。そういう土と、水と、太陽だけで米が作れるんです」

青々と繁る稲を眺めつつ、祠の石段に座って真砂秀朗さんの話を聞いていると、どこか悠久の時の流れに引き込まれていくような気がしてくる。

「縄文や弥生時代の人たちは、こんな場所で米を作っていたんです。しょうね。養分が豊富で、水は自然に流れ落ちてくる。稲は強いから、手を掛けなくてもよく育つ。毎日森に分け入って木の実や獣を探すより、ずっと簡単に確実に食べ物が手に入る」

真砂さんたちの米作りも、縄文人と大きな違いはない。長年休んでいた土地だけに養分は豊



現在50歳という真砂秀朗さんは、世界各地のネイティブカルチャーへの旅で出会った楽器を演奏しつつ独自の音楽を創作し、同時にヴィジュアルアートの分野で活動している。夫人の三千代さんは、オーガニックな素材を使った服「Afa」を主宰するデザイナー。お互い手法は違えど、自然と人とのありのままの姿にフォーカスしている



富で、今のところ肥料も必要ない。これが仕事として取り組んでいたなら、生産性を上げる必要があるから広い土地が必要になるだろうし、効率を考えたら農薬も使うかもしれない。それはどこか、自然の生態系をも支配しようとしてきた現代文明をも象徴している光景でもある。果たして現代文明は、本当に人を豊かにしてきたのだろうか。

真砂さんは若い頃からアジアやアフリカ、アメリカ中西部を旅して、ネイティブな文化に触れてきた。ライフワークとして取り組んでいる音楽とアートも、そこで出会った内面からの深い感銘が原点となっている。

「雨が降れば気になり、降らなければまた心配になる。そうして結局、毎日田んぼを見に行っちゃうんです」

自然と生活が切り離されていないありのままの生活。真砂さん今、それが自分のものになってきた実感を抱いている。



真砂さんが主宰するレーベル「AWA」ではこれまで10枚のCDをリリースしている。詳しくは、[www.awa-muse.com](http://www.awa-muse.com) まで